

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 16 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520410

研究課題名（和文） 時制の無標形態素の連続生起，および，動詞の基底形に関する理論的・実証的研究

研究課題名（英文） A theoretical and scientific research on the consecutive occurrences of the unmarked tense morpheme and the verbal base forms

研究代表者 古賀 弘毅（KOGA HIROKI）

佐賀大学・留学生センター・准教授

研究者番号：80330215

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語・柳川方言における動詞のいわゆる「非過去」形の現象（例えば、'sleep-Nonpast'の意味であれば、*/nu/でも*/neru/でもなく、/nuru/と、'eat-Nonpast'の意味は、*/tabu/でも*/taberu/でもなく、/taburu/と言う）は、以下の3つの仮定により説明できることを明らかにした。仮定1：「非過去辞」/(r)u/を「時制虚辞」と分析し、それゆえ、ひとつの動詞の語幹に対して連続生起を許すとされる。動詞語彙素には複数の語幹があり得ると仮定し、時制虚辞は、複数語幹の場合は短い方を選択する。さらに、時制虚辞は、時制虚辞句も選択し得るとしている。仮定2：時制つき動詞形は、2音節かあるいはそれ以上でなければならない。仮定3：動詞語彙素が与えられたとして、一つの動詞形、つまり、動詞語幹に対して、それぞれの動詞の形態群内で、時制形態の数は同一でなければならない。分析に加えて、本研究は、実証データを提供している。佐賀西部方言の日常でよく使われる266個の動詞の「非過去」形を国際音声記号(IPA)で記述した。266個の非過去形の動詞を含む文の母語話者による発話を録音し、WEB上で聞けるようにした。同方言では「/e/終末語幹」動詞群に時制の無標形態素の連続が現れていた。

研究成果の概要（英文）：The current research made it clear that the phenomena of the so-called 'non-past' verbal forms of Yanagawa-Japanese dialect (e.g., /nuru/, but not */nu/ or */neru/, is used to mean 'sleep-Nonpast', /taburu/, but not */tabu/ or */taberu/, is used to mean 'eat-Nonpast',) are explained by three assumptions as follows. Assumption 1: The so-called 'non-past' morpheme is analyzed as the tense expletive, and so, is allowed to repeat for one verbal stem. Assuming that some verbal lexemes can be associated with two stems, the tense expletive /(r)u/ selects the shorter verbal stem if there are two stems for a verbal lexeme. The tense expletive also selects the verbal form with its tense feature expletive. Assumption 2: The number of the syllables for a verbal form is two or more. Assumption 3: The numbers of the tense morphemes for a verbal stem in one verbal form within each morphological group are the same. In addition, the current research has provided data. We described the 'non-past' forms of 266 verbs which correspond to standard ones frequently used in daily conversations, by the international phonetic symbols. The utterances of these by a native speaker of the dialect were recorded. The doubling of the unmarked tense morpheme is found in the verbal forms whose basic verb stem ends with the vowel /e/.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000

年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：非過去形，時制の無標形態，恒等関数，動詞の基底形，時制，韻律最小値，変格活用

1. 研究開始当初の背景

応募者は、枠組み Koga 2008 を作ったが、本研究では、この枠組みで形態、音韻、語彙上の制約(1)~(3) と同方言の制約(4)を提案し、最適理論(Lee 2004) に沿って、問題の現象を説明できることを示そうと、研究を開始した。

1) 形態素繰り返しに対する経済「他の制約が必要としなければ、形態素を繰り返してはいけない；他の制約が必要とすれば繰り返してよい」，

2) 動詞定形の音韻的重さ「最小形態の動詞の定形の韻律構造は、一拍を超えなければならない」，

3) 動詞の名詞/s/の動詞「1 漢語音のみからなる動詞的名詞については、その音列と/s/の音列は子音終末語幹動詞の基底形として語彙に存在する。

4) 形態群内制約「動詞形態類において定形の時制形態素の数は同一である」(柳川・佐賀西部方言)

Koga, Hiroki. 2008. 'Multiple occurrences of the default morpheme of tense.' (原稿) 佐賀大学. <http://www.isc.saga-u.ac.jp/h-koga/index.html> でダウンロード可.

Lee, Hanjung (2004) Minimality in a lexicalist optimality theory. In: Stepanov Arthur, Gisbert Fanselow and Ralf Vogel (eds.) Minimality Effects in Syntax, 241-288. New York: Mouton de Gruyter.

2. 研究の目的

応募者は、方言や古典語を含む日本語全般の下記記述の現象を説明する科学的な文法の

構築を構想しており、本研究は、その中の一部で、その目的は、標準語および九州西北部(福岡西部・佐賀西部)方言の時制「非過去」と動詞形態のさまざまな音韻・形態・統語・意味の現象を説明する科学的な文法の考察であった。

3. 研究の方法

研究の方法は、文法(理論)の厳密な検証と現象の厳密な記述であった。

文法検証: 文法を a) 構文解析器における文法の実装と演繹試験と、b) 関連の言語学者等との議論によって検証する。議論による検証については、応募者は、聞き手の疑問点や不明な点にその場で逐一、答え、議論を実質的なものにするよう、発表する。

現象記述: 佐賀西部方言の日常でよく使われる 266 個の動詞の「非過去」形と否定形を国際音声記号(IPA)で記述する。同方言では「/e/終末語幹」動詞群にも無標形態素の連続が現れている。

4. 研究成果

本研究の成果は、日本語・柳川方言における動詞のいわゆる非過去形の現象を科学的に説明する分析を明確にしたことである。分析は以下：同現象は、3つの仮定により説明される。仮定1：「時制虚辞は、1) 動詞の語彙素にふたつの語幹がある場合には、その短い方(例えば、/ne/ 'sleep'ではなくて/n/, /təbe/ 'eat'ではなくて/təb/)を選択するか、あるいは、2) 時制が虚である動詞形(例えば、/n#u/ 'sleep#Tense Expletive', /təb#u/ 'eat#Tense Expletive')を選択する」。仮定2：「時制虚辞・過去時制動詞形は、2音節かあるいはそれ以上でなければならない」。例えば、(1)

-a /n#u/ 'sleep#Tense Expletive'は1音節で、この時制つき動詞形の最少音節数に違反するが、一方、(1) -c 時制つき動詞形/n#u#ru/ 'sleep#Tense Expletive#Tense Expletive'はこの時制つき動詞形の最少音節数に違反しない。

- (1) a. *[_o n u] (syllabification)
 b. [v n [_T [_{expltv} u]]] (syntax)
 c. [[_o n u]-[_o ru]] (syllabification)
 d. [v n [_T [_{expltv} u]]-[_T [_{expltv} ru]]] (syntax)

これらの二つの仮定では、(2) -a*/tab#u/ 'eat#Tense Expletive'は、説明できない。仮定3が必要となる。仮定3：「それぞれの形態群内では、動詞形において、動詞の語彙素の一つの動詞語幹に対して、時制形態の数は同一でなければならない」。

- (2) a. *[[_o ta] [_o bu]] (syllabification)
 b. [v tab [_T [_{expltv} u]]] (syntax)
 c. [[_o ta] [_o b u]-[_o ru]] (syllabification)
 d. [v tab [_T [_{expltv} u]]-[_T [_{expltv} ru]]] (syntax)

この包括的な制約は、それと同一の動詞の基礎語幹が母音/e/で終わる動詞の形態群に属する/n/ 'sleep' plus /u/, /n#u/ 'sleep#Tense Expletive' が最少制約に違反するから、(2)-a *[[_o ta] [_o bu]]を許可しない。

加えて、佐賀西部方言の日常でよく使われる266個の動詞の「非過去」形を国際音声記号(IPA)で記述したことはもう一つの研究成果である。266個の非過去形の動詞を含む文の母語話者による発話を録音し、WEB上で聞けるようにした。同方言では、例外なく、「/e/終末語幹」動詞群に時制の無標形態素の連続が現れていた。

なお、本研究は、他の方言や古典日本語など日本語全般における動詞派生接辞や屈折接辞がどのように動詞の語幹を選択するかに関する一般化された科学的な仮説を提供し、かつ、高度構文解析器上における実装の環境を整えた(Koga 2011)。この一般化した分析では、1) 接辞が統語・意味上の選択の仕様のみにならず、形態上の選択の仕様をも特

定することがある、2) 語幹は形態的な仕様としては、i) 長い方か短い方かと ii) 基本語幹かそれとも派生された語幹かを特定しているというふたつの点が有効である。なお、接辞による形態上の選択の制約が、文法の核となる部門にあるのか、それとも、文法の核となる部門の外側の表層的な制約としてあるのかは、その制約の自律性と関連データの方言間における相違が関連する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

古賀弘毅, Consecutive occurrences of the tense expletive: in case of a 'shorter' event-describing morpheme plus /s/, 佐賀大学留学生センター紀要, 査読無, 第9号, 2009年, 1-14頁

[学会発表] (計4件)

- ① KOGA, Hiroki, Affixes' selections of verbal stems/forms, 日本言語学会第143回大会, 査読有, 2011年11月26日, 大阪大学豊中キャンパス
- ② KOGA, Hiroki, Surface constraints on multiple occurrences of the default morpheme of tense, Workshop on Morphology and Formal Grammar, 査読有, 2010年7月8日, Maison de la recherche, L'Université Paris-Sorbonne, Paris, France
- ③ KOGA, Hiroki, Surface constraints on multiple default morphemes of tense, 9th International Conference on Tense, Aspect and Modality (CHRONOS 9), 査読有, 2009年9月3日, Université Paris-Diderot, Paris, France
- ④ KOGA, Hiroki, Surface constraints on multiple default morphemes of tense, Workshop on Morphology and Lexicon Forum, 2009年7月4日, 東北大学

[図書] (計1件)

古賀弘毅, 三恵社, 『佐賀西部方言を「科学」しよう! : 言語理論入門』, 2011年, 114頁。

[その他]

ホームページ等

- ① <http://theoreticallinglab.isc.saga-u.ac.jp/html.html>

(先述した雑誌論文の原稿および学会発表で読まれた原稿をこのホームページの「学術業績」で参照可能)。

- ② 同ホームページの「学術業績」の Koga, Hiroki and Koji Ono. The sound data of the `non-past' forms of two hundred sixty-six (266) verbs of Saga western dialect, March 2011 で佐賀西部方言の動詞の非過去形を含む文を聞ける。(この原稿は, Koga, Hiroki and Koji Ono. The `non-past' forms of two hundred sixty-six (266) verbs of Saga western dialect, (manuscript), March 2011 で見ることができる)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古賀 弘毅 (KOGA HIROKI)
佐賀大学・留学生センター・准教授
研究者番号 : 80330215

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者

小野 浩司 (ONO, KOJI)
佐賀大学・文化教育学部・教授
研究者番号 : 80177261

堂菌 浩 (DOZONO, HIROSHI)
佐賀大学・工学系研究科・准教授
研究者番号 : 00217613